

information 2026年夏号

「ことば蔵」HP

☆☆ことば蔵 伊丹市立図書館本館☆☆ 〒664-0895 兵庫県伊丹市宮ノ前3丁目7番4号
TEL:072-783-2775(代) HP:<https://www.city.itami.lg.jp/SOSIKI/EDSHOGAI/EDLIB/index.html>



おすすめの一冊



『となり町戦争』

(三崎 亜記／著 集英社)

F

ミサ

『となり町との戦争がはじまる。』

衝撃的な文章から物語は始まります。

ある日突然「となり町との戦争のお知らせ」と書かれた広報が手元に届いたら、あなたはどうしますか？今や世界のどこかで確実に行われている戦争は、決して他人事ではありません。しかし、普段の生活の中でそれを身近に感じている人が、一体どれ程いるでしょうか。

物価高騰やニュースの映像を通してしか、私たちは戦争を実感できません。

開戦当日になっても変わらない日々。普段通りの毎日に戦争の気配は全くありませんが、淡々と、確実に戦争の影は忍び寄ってきます。広報で機械的に知らされる戦死者の数。不気味なほど静かに、戦争は進行していくのです。

“一体何のために戦っているのか？”

何も分からないまま過ぎゆく日々の中、主人公は「偵察業務」の辞令を受けます。そして、敵地・となり町での偵察任務。

となり町への潜入、身元の発覚、夜の逃亡。そして、差し伸べられる援助の手。緊迫した状況の中に、奇妙な安らぎが混在します。

物語の中で直接的な戦争描写はありません。しかし、それこそが底知れない恐ろしさを醸し出しています。最も不可解なのは、町民たちが戦争を当然の事実として受け入れ、行政の決定に反論する人がほとんどいない事。

『この町の戦争事業は、「地域振興」の名の下に行われたのだ。何百人もの命を失って遂行された戦争という「事業」は、いったいどれだけの「振興」をこの町にもたらしたのであろうか。(中略)戦争は、日常と切り離された対極にあるのではなく、日常の延長戦上にあるのだ。』

作中の引用が示す通り、戦争は遠い国の出来事ではなく、私たちのすぐ隣にあるのかもしれない。世界中の人びとが、笑顔で暮らせる平和な社会が続くことを願わずにはいられなくなる一冊です。(T.N.)

新人紹介



★これまで全くちがう仕事に就いていましたが、子供のころから本と図書館はいつもそばにあって親しんできました。今はまだ自分の仕事が精いっぱい周りが見えず至らぬ点多々ありますが、早く皆さんのお役に立てるように努めてまいります。(ホルス)

・ 最近読んだ本:『家族』(葉真中 顕/著 文藝春秋)

★本は特別好きというわけではありませんが、ご縁があり図書館で働くことになりました。今のところ、静かに歩く技術と返却日の確認だけは順調に身につけています。館内のどこかで、ひっそり馴染んでいければと思っています。よろしくお願いします。(導羅麵照)

・ 最近読んだ本:『ホースペディア』

(田谷 一善/編著, 石丸 睦樹/共著, 対馬 美香子/共著 ラトルズ)

『サラブレッド大辞典』(ウマフリ/編著 カンゼン)

『北極星』(西野 亮廣/著 幻冬舎)

よろしくお願いいたします



書庫にねむる本を
見てくださいつつ



『The History of Jobs & Apple』

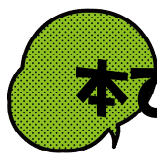
1976～20XX, スティーブ・ジョブズとアップル奇蹟の軌跡』

007.3/Z (晋遊舎)

スマホ表示の図書館利用券を差し出される機会が多くなりました。今や携帯電話と言えはスマートフォンを指し、スクリーンをタッチしての操作、たくさんのアプリを使えるものが当たり前となっています。iPhoneとして発表されたこの仕様が携帯電話のスタンダードとなり、Appleが、ジョブズが、社会にどれだけの影響と貢献があるか計り知れません。

2026年は、Apple創業50周年。この間ジョブズたちはどんなことを考え、Appleはどんな製品を作り出してきたのか、カラー写真が多数(Apple製品はお洒落)のMOOKです。リンゴの木の下に座るニュートンが描かれたロゴからたった50年。かじられたリンゴのロゴを見るだけで、私たちに「新しい何か」を抱かせる企業へと進化しました。

図書館には最新の情報から歴史を紐解く資料まで所蔵しています。イノベーションを生み出すきっかけをぜひ図書館で見つけてください 🍏 (まる)



本で喜怒哀楽ってみる？



『はたらく中華料理店』エ/ハタ (吉田 亮人/写真, 矢萩 多聞/文 創元社)
「写真絵本はたらく」シリーズの1冊。写真家の息子さんが、ご両親が40年間切り盛りしてきた中華料理店の一日を、白黒写真で撮っています。お店の名前は「喜樂園」。
(谷)



『おしゃれ防災アイデア帖』369.3/O (Misa/著 山と溪谷社)
災害への備え、何かしないと不安だけれど、何をしてもいいかわからない。不安が焦りになり、ついには何も出来てない自分にイライラ…。そんな時、本はどうでしょう。暮らしの中で無理なく続けられる防災のアイデアや工夫が載っています。(なか)



『ひとのなみだ』P/エ/ヒト (内田 麟太郎/文, nakaban/絵 童心社)
ぼくたちはうすうすしていた ロボットがしていることを。現実味のない画面の向こうの戦争、しかし戦争の残酷さを体感したとき、すこしずつロボットがひとにもどっていく。第30回日本絵本賞にも選ばれた一冊。(りらくま)



『なぜ、この人と話をすると楽になるのか』361.4/N
(吉田 尚記/著 太田出版)
元コミュ障のアナウンサー直伝、相手を楽にさせる実践的な会話術。こんな人になりたいですね。(shang)

むかしむかし。

7月・8月・9月にこんなことがありました。



- 1965年7月1日 … 名神高速道路、全線開通(小牧—西宮間189.7km。総工費1150億円。日本初の本格的な高速自動車専用道路)。
- 1924年8月1日 … 阪神甲子園球場竣工(13日同球場で第10回全国中等学校野球大会を開催)。
- 1923年9月1日 … 関東地方南部に大地震(マグニチュード7.9)、東京・横浜では大火災・家屋倒壊の被害甚大(関東大震災、死者9万9331人、行方不明4万3476人、負傷者10万3733人、全壊家屋12万8266戸、焼失家屋44万7128戸、罹災者数約340万人)。



書評本を拝誦

『列島の日本美術史 知られざる美の交錯』

721.0/R (古田 亮／編著 ミネルヴァ書房) 2025年5月産経新聞評

本書に登場するのは、全国各地の美術館博物館で開催された展覧会で取り上げられた19人の画家たちです。そして彼らについて執筆しているのは、各地で活躍中の学芸員の方々です。その土地土地を代表する画家について、一番身近で調査研究を行ってきた学芸員の論考を集めて書籍にした点が、本書の面白さの一つだと思います。もちろん取り上げられた画家たちも個性豊かで、実物の作品を見てみたいと思わせる画家たちばかりでした。

その土地、その地域にゆかりのある画家にスポットを当てた展覧会には、その場所でしかない発見や文化の継承など大切な役割があるんだと再認識しました。

各地のバラエティ豊かな19人の画家たちの人物と作品は、実際に本書で確かめてみてください。(なか)

作家紹介 ～ 佐藤愛子～ (1923年～2026年)

大阪生まれ、西宮育ち。父は少年小説家・佐藤紅緑、母は元女優の三笠万里子。異母兄に詩人・作詞家のサトウハチローを持ち、ご本人は言わずと知れた小説家・エッセイストです。

母の勧めで執筆を始め、1969年『戦いすんで日が暮れて』で第61回直木賞受賞。2000年に大河小説『血脈』が菊池寛賞、2017年には旭日小綬賞を受賞。100歳を超えても精力的に執筆を続けました。まさに生涯現役作家。自らの波乱万丈の人生や佐藤家の凄絶な家族模様から家族をテーマにした『花はくれない』『女優万里子』があり、またユーモアと毒舌で切り取るエッセイには笑えるエピソードが満載。無言電話への反撃や孫育ての攻防、心霊現象との30年以上にわたる死闘など、プライベートを赤裸々にかつ面白く書かれています。この「なんでも面白がって生きる」スタイルは、佐藤家の「災難(理不尽)を面白がって生きる」家風が基盤となっているそう。晩年は『九十歳。なにがめでたい』や続編『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』が大ベストセラーとなり、長寿をめぐる世間の風評をバツサリ斬る痛快さで人気を博しました。

佐藤愛子氏のエッセイは、苦難や老いを怒りつつ笑い飛ばす姿勢が最大の魅力。読むと元気が出るだけでなく、「人生ってこんなに面白いんだ」と実感できます。(水無月)